

## 話題のモモ新品種「さくひめ」の品種特性

～6月下旬から収穫できる、果実品質に優れたモモ新品種「さくひめ」登場～

加藤 実（農業総合試験場園芸研究部落葉果樹研究室）

【平成29年11月15日掲載】

### 【要約】

農研機構が育成したモモ新品種「さくひめ」（系統名：筑波127号）を愛知県農業総合試験場で試作した。その結果、「さくひめ」の樹勢は強く、花芽の形成及び結実は良好であった。開花盛期は3月27日で、「日川白鳳」より10日程度早かった。収穫期は6月下旬から7月上旬で、「日川白鳳」より4日ほど早かった。果実重は230g程度で、食味は良好であった。果皮の赤く着色する部分が少ないため、光反射マルチシート等の利用が着色に及ぼす影響を検討したところ、6月上旬に光反射マルチシートを樹冠下全面に被覆することで、着色が向上する傾向が認められた。

### 1 はじめに

「さくひめ」は、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門（以下「農研機構」という。）が育成した品種である。6月下旬から収穫でき、果実品質に優れていることから注目されている。ここでは、平成29年秋より苗木が販売される見込みの「さくひめ」の品種特性を紹介するとともに、愛知県での試作結果について紹介する。

### 2 モモ新品種「さくひめ」について

日本のモモは、冬期に7.2℃以下の低温に1,000～1,200時間程度遭遇しないと春に生育しない。今後、温暖化が進行し、冬の気温が高くなると、休眠覚醒に必要な低温要求時間の不足が予測されることから、農研機構では、海外の低温要求時間が短いモモ品種を交配親として利用して、早生のモモ品種を育成した。

「さくひめ」は、ブラジルから導入した低温要求時間の短い品種「Coral」と、日本の果実品質に優れた早生品種「ちよひめ」などの交配により育成され、以下の特性を持つ。

- ・樹勢は強く、花芽は多く着生する。
- ・花粉を有するため受粉樹は不要、生理落果は少なく、結実は良好。
- ・開花盛期<sup>\*1</sup>は、育成地（茨城県つくば市）では「日川白鳳」より9日程度早い3月下旬、収穫盛期<sup>\*2</sup>は「日川白鳳」より5日程度早い、6月下旬である。
- ・果実の重さは250g程度、果肉色は白色、糖度は12～13程度、pH4.6程度と酸味は少なく「日川白鳳」と同程度で、食味は良好である。核割れの発生は少なく問題とはならない。
- ・果皮の赤く着色する部分は、「日川白鳳」に比べて同等かやや少なくなる傾向。

\*1 開花盛期：80%の花が開花した時、\*2 収穫盛期：収穫果が半数に達した日

### 3 愛知県での試作結果

(1) 「さくひめ」の生育、果実品質（2013～2015年）及び収量（2012～2016年）

2010年に「おはつもも」台に接ぎ木した「さくひめ」と「日川白鳳」の生育、果実品質及び収量を比較した。愛知県で試作した「さくひめ」も、樹勢は強く、花芽も多かった。また生理落果は少なく、結実も良好であった。開花盛期は3月27日で、「日川白鳳」より10日程度早かった。収穫盛期は、7月3日で、「日川白鳳」より4日早くなった。

果実は、重さは230g程度で、果肉色は白色であった（写真1）。糖度、酸味は、「日川白鳳」と同程度で食味は良好であった。また、核割れの発生は「日川白鳳」より少なかった（表1）。

果皮の赤く着色する部分は、「日川白鳳」と比較して、少なかった。

1樹当たりの収量は「日川白鳳」より多く推移し、収量性は良いと思われる（図1）。

表1 「さくひめ」の生育特性と果実特性

| 品種   | 樹勢 | 花芽の着生 | 開花盛期 | 生理落果 | 収穫期  |      |     | 果実重 (g) | 糖度 (%) | 酸度 (pH) | 硬度 (kg) | 核割れ |
|------|----|-------|------|------|------|------|-----|---------|--------|---------|---------|-----|
|      |    |       |      |      | 始め   | 盛期   | 終わり |         |        |         |         |     |
| さくひめ | 強  | 多     | 3/27 | 少    | 6/25 | 6/29 | 7/2 | 229     | 13.0   | 4.3     | 0.98    | 少   |
| 日川白鳳 | 中  | 多     | 4/6  | 少    | 6/29 | 7/3  | 7/6 | 209     | 12.9   | 4.2     | 0.70    | 中   |

（愛知県農業総合試験場（愛知県長久手市）、2013～2015年の3か年平均値、無袋栽培）

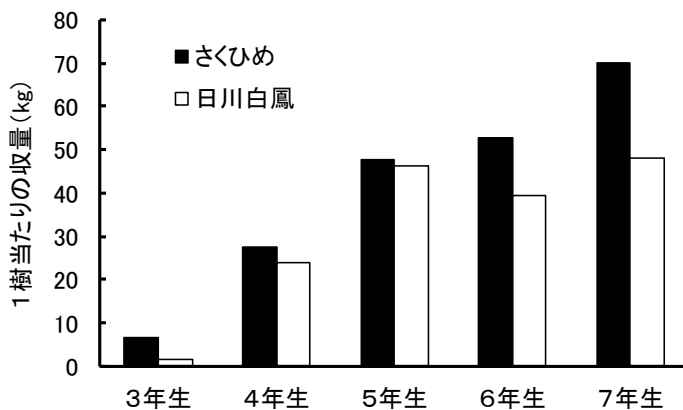


図1 1樹当たりの収量の推移（2012～2016年）



写真1 「さくひめ」の果実

（愛知県農業総合試験場、2016年6月撮影）

(2) 着色向上対策の検討(2016年)

中部圏の消費者は、果皮が赤く着色したモモをより好む傾向がある。このため、愛知県内のモモ産地では、赤色が濃く、着色面積の多い「日川白鳳」や「白鳳」などを主に栽培している。「さくひめ」は、「日川白鳳」に比べて果皮の着色する面積が少なく、色が薄くなる傾向があるため、愛知県での導入を考えた場合、着色向上対策が必要と考えられた。

そこで、光反射マルチシートが「さくひめ」の着色に及ぼす影響を検討した。光反射マルチシートを2016年6月6日に設置する区と設置しない区を、各1樹において設定した。収穫日の翌日に着色割合を調査した。着色割合は、1個の果実のうち何%の表面積

が着色したか調査し、調査個数は1区あたり20～30果とした。その結果、光反射マルチシートを6月上旬に樹冠下全面に被覆することで、果皮の赤く着色する面積が多くなり（表2）、着色が向上する傾向が認められた（写真2）。

表2 光反射マルチシートが「さくひめ」の着色に及ぼす影響

| 調査区名      | 着色割合<br>(%) |
|-----------|-------------|
| マルチシート設置区 | 64          |
| 無設置区      | 25          |



マルチシート設置区



無設置区

写真2 着色向上対策の有無による収穫果の外観の違い

#### 4 おわりに

「さくひめ」の品質の高さは確認できたので、外観（着色）を改善すれば、本県における普及の可能性はある。今後は着色向上技術の確立に向け、果実品質や収穫期に及ぼす影響の検討と併せて試験を継続する予定である。

また、導入の際の注意点として、「さくひめ」は開花期が早く、晩霜害を受けるリスクが他の品種より高いと考えられるため、ほ場条件を十分に考慮することが必要である。

【参照】農研機構プレスリリース「西南暖地に向く早生モモ新品種『さくひめ』」

[http://www.naro.affrc.go.jp/publicity\\_report/press/laboratory/nifts/076023.html](http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/press/laboratory/nifts/076023.html)